

# “不是…吗？”構文に用いる指示詞をめぐって

——日中対照を兼ねて——

曹 泰 和

## 1. はじめに

中国語の指示詞は周知のように“这”と“那”の二系列である。この二系列の指示詞は、使用分布において“不对称现象”のあることがすでに指摘されている。

例えば、吕叔湘 1984a (72 頁) では、“指上文用‘这’和‘那’都可以；指下文，用‘这’不用‘那’。”という指摘がある<sup>1)</sup>。また、徐丹 1988 (128 頁) では、“这”と“那”におけるいくつかの“不对称现象”を挙げている<sup>2)</sup>。そして、沈家煊 1999 (167 頁) によれば、《现代汉语频率词典》で示される“这”と“那”の使用頻度は“这” — 9139；“那” — 3264 となっている。

本稿では“不是…吗？”構文における“这”と“那”の使用<sup>3)</sup>を調べたところ、次のような結果が出た。

	指示詞を用いない例	“这”を用いる例	“那”を用いる例
不是…吗	401 例 (80.2%)	82 例 (16.4%)	17 例 (3.4%)

この結果から、反語文の“不是…吗？”構文における“这”と“那”の使用分布も不均衡であることが分かる。そして、“不是…吗？”構文において、指示詞と共起しない例は 8 割で、共起する例が 2 割であることも分かった。指示詞との共起が 2 割弱という割合は、けっして大きくはないが、日本語の「デハナイカ」構文と比べると、“不是…吗？”構文における指示詞の使用が目立つ、というのも事実である。例えば、“诶，这不是小刘吗？”、“她这不是向你道了歉

了吗?”の場合、日本語では、「あら、劉さんじゃないの。」「彼女はあなたに謝ったじゃないか。」と、指示詞を用いないのが一般的であろう。

本稿第2章では、“不是…吗?”構文において、どのような場合に指示詞を用い、どのような場合に指示詞を用いないのかについて明らかにし、それぞれの理由について述べる。第3章では、日中対照の視点から、中国語の指示詞の使用がなぜ日本語の文より多く使われているのかを見る。第4章では、有標(marked)無標(unmarked)の視点から“不是…吗?”構文における“这”と“那”の使用を考察する。なお、中国語の指示詞については、特別に言及していなければ、“不是…吗?”構文における考察を指す。

本稿の目的は、①なぜ、“不是…吗?”構文において、“这”と“那”の使用に「不均衡」があるのか。②指示詞を使用したり、使用しなかったりする理由は何か。③日本語と比べて、中国語の“不是…吗?”構文には、なぜ指示詞が多く用いられるのか。④“不是…吗?”構文における“这”と“那”の使用について、どのような特徴があるのか。本稿はこれらのことについて考察したい。

## 2. 指示詞の使用と不使用

第1章の表で示したように、“不是…吗?”構文において、本研究で対象とした用例中、指示詞を使用していない例文は8割ほどを占める。この使用率から言えば、指示詞の不使用は“不是…吗?”構文にとって、無標の形式であり、指示詞の使用は有標の形式となる<sup>4)</sup>。

### 2.1 指示詞の使用

まず、指示とは何か。吉本1992(107-108頁)によれば、指示を直接指示と間接指示とに分ける。直接指示はさらに現場指示(deixis)と文脈指示(anaphora)とに分けられ、間接指示は唯一指示(unique reference)と総称指示(generic reference)とに分けられる。また、Levinson1983によれば、現場指示は人称指示(person)、場所指示(place)、時間指示(time)会話指示(discourse)

と社会指示 (social) に分けられる。

文脈指示について、吉本 1992 では「文脈指示とは指示物の同定が談話記憶にもとづいて行われる場合である。」と定義している。本稿はこれを参考にして、次のように定義したい。

・文脈指示とは、“这”あるいは“那”によって指示された内容が前方の文脈 (“上文”) または後方の文脈 (“下文”) に依存して判断される場合である。

現場指示について、吉本 1992 では「現場指示とは、指示物の同定が外界または出来事記憶にもとづいて行われる場合である。」と定義している。本稿は Levinson の現場指示の下位分類を参考とし、現場指示を次のように定義する。

・現場指示とは、指し示す対象の同定が発話現場に依存して判断される場合である。現場指示の範疇には、人称指示、場所指示、時間指示、会話指示のほかに、発話現場で行われた行為指示、発話現場の状況指示も含まれている。

例えば、次の例は、行為指示 (例 1 と 2) や状況指示 (例 3) として考える。

(1) (ゴミ箱に食べ物を捨てた相手を見て) 还能吃呢就仍, ☐不是浪费吗?

(2) (子どもに怒っている妻に) 你☐不是冲我来的吗?

(3) A: (狭い部屋を見て) 这么小的房间!

B: ☐不是挺好的吗? 对我来说有个地方住就行。

上のような基準にもとづいて、“不是…吗?” 構文における指示詞の使用を文脈指示と現場指示とに分けた。その分布は次の表で示す。

	文脈指示	現場指示
这 (82 例)	24 例 (29.3%)	58 例 (71%)
那 (17 例)	12 例 (71%)	5 例 (29.4%)

この結果から、“不是…吗?” 構文において、“这” は現場指示の用法が典型的で、“那” は文脈指示の用法が典型的であると言える。

さらに、詳しく見ると、“那” には人称指示と場所指示、記憶指示しか見られなかったのに対し、“这” は、人称指示、場所指示のほかに、会話指示、行

為指示、状況指示というようにバラエティに富む。特に上で挙げた例(1)と(2)のような行為指示が多かった。これも“这”が“那”より多く用いられた原因の一つとして考えられる。

### 2.1.2 “这”あるいは“那”を用いる場合

中国語では、“这”と“那”を用いて「人」や「物」を指すことができる。「人」を指す場合は、指している人が聞き手の場合もあれば、第三者の場合もある。会話文において、具体的な指示物—「人」あるいは「物」を指す場合、“这”を用いるか、“那”を用いるかは、基本的に物理的な距離によって選択される。

- (4) “这不是剑云吗？”觉慧惊讶地对觉民说。

觉慧回过头叫了一声：“剑云！”（巴金《家》）

- (5) 这当儿，正巧那个在大车店当打杂的高二林回来取东西，发现了他，高兴地喊着：“嗨，这不是我哥吗？我哥回来了！我哥回来了！”高大泉回来了。（浩然《金光大道》）

- (6) 燕西用手杖敲着月亮门，吟吟地笑。吴佩芳隔着玻璃窗子便叫道：“那不是老七吗？”燕西便走进月亮门说道：“大嫂，是我。”

（张恨水《金粉世家》）

- (7) 这不是我的笔吗？怎么在这儿呢。

- (8) （探していた時計を見つけて）诶，那不是你一直在找的表嘛。咱们怎么都没发现呢。

これらの「“这”／“那”＋“不是…吗”」は、話し手の「気づき」や「驚き」を表し、「眼前」の発見や驚きが多いため、“那”より“这”の使用が多く見られる。

### 2.1.3 “这”を用いる場合

“这”の用例を見ると、下記のような前文を指す場合（例9）もあれば、後文を指す場合（例10）もある。指し示す内容は、発話現場の状況（例10）、聞き

“不是…吗？”構文に用いる指示詞をめぐって

手の行為（例 11）、話し手の現在の様態（例 12）、聞き手の発話（例 13）または、話し手の独り言（例 14）、といったものである。

(9) 四十多块钱买一箱可口可乐放到家里，这不是吃饱了撑的？

（刘震云《一地鸡毛》）

(10) 我问他为什么居住条件这样差？他笑笑，说：“这不是满好吗？有睡觉的地方，有写作的地方，可以了。”告辞时，他都一直将我送到公共汽车站。

（梁晓声《京华闻见录》）

(11) 他惋惜地咂着嘴，又很奇怪地问：“老范，你怎么故意把他放走啦？

这不是奖励他干坏事儿了吗？”（浩然《金光大道》）

(12) 朱大姐是有过这段生活体验的，赶忙拉他过来，埋怨地说：“阿宝，你怎么能想不开呢？女人总有收心的时候，你看我和你大叔，不也过得很好么？”“我没有上吊”他辩解着：“我这不是好好的嘛！”

（李国文《危楼记事》）

(13) “要嫁我吗？”他吐出一口烟，略带微笑却依然忧郁地问我。

“嫁你？”

“是呀，这不是你要告诉我的吗？”白色的烟圈在他面前越扩越大。

（黄忆依《蓝色星》）

(14) （独り言）（人家说白给我，我却拒绝了）我这不是太傻了吗？

#### 2.1.4 “那”を用いる場合

本稿で収集した「人」を指す以外に用いる“那”の例としては、大体次のような場合がある。一つは、遠くにある場所を指す場所指示である。

(15) 看，那边不是有山吗？人往高处走，水往低处流。（老舍《宝船》）

(16) 你仔细看，那上面不是有极细的碎粉吗？（张恨水《金粉世家》）

遠称の“那”は具体的な場所を表す場合、基本的には、物理的な距離によって選択されている。

“那”を用いるもう一つの指示用法は文脈指示である。前の発話や文脈を受

け、“那样的话”“那么”といった話し手の推論を表したり、また話し手の結論を導く働きを担う。

(17) 起来了又睡，那不是发疯了吗？（张恨水《金粉世家》）

(18) 旁人要说，那不是瞎说吗？（张恨水《金粉世家》）

(19) 你怎么在机关里骂李鹏呢？那不是飞蛾投火吗？

（白帆《女大学生综合症》）

吕叔湘 1984a（72 頁）では、“那”は前方の文脈（“上文”）を指す場合のみに使用されるという指摘があった。後方の文脈（“下文”）を指す例は“不是…吗”構文においても見られなかった。

## 2.2 指示詞の不使用

すでに述べたが、“不是…吗”構文において、指示詞を伴わない例は8割ぐらいある。つまり、指示詞を使用しないのは一般的で、無標な形式である。それでは、指示詞を用いないのはどういう場合であるのか。

### 2.2.1 「聞き手に気づかせる」場合

まず“不是”の後ろに「人」を表すことばが来る場合の例を見てみよう。

(20) 小颜说：“少说废话，带走！”

奶奶眼珠一转，让出了小颜，忙说：“你（\*这）不是俺干爹的部下吗？”

小颜说：“与你不相干，好好过你的日子吧！”（莫言《红高粱》）

(21) 花脖子拿起爷爷那两支枪，看看枪口，勾勾空机，说：“倒是两件好家伙，你学枪干什么？”

爷爷说：“打曹梦九。”

花脖子问：“他（\*这）不是你老婆的干爹吗？”

爷爷说：“他打了我三百五十鞋底！我可是替你挨的打。”

（莫言《红高粱》）

上記の二つの例はどちらも“这”を使用できない。例 (1) (2) (3) の相手に気づいた時の“这”と比べ、例 (20) と (21) は「聞き手に気づかせる表現」

とも言える。例(20)では、聞き手に“你是俺干爹的部下”、“他是你老婆的干爹”ということを感じさせることで、聞き手の行動が「理に合わない・筋が通っていない。」ことを主張しているのである。つまり、この場合の“你不是俺干爹的部下吗？”という発話は“你是俺干爹的部下”を表すための発話ではなく、“那你不应该抓我。”を言うために用いられている。例(21)も同じく、“他是你老婆的干爹，你怎么还打他呢？”といういぶかりの意味を表している。これは、相手の応答からも分かる。“他打了我三百五十鞋底！我可是替你挨的打。”は「彼があなたの女房の義理のお父さんであるかどうか」についての答えではなく、「なぜ、彼を殺したいのか」についての答えとなっている。つまり、これらの文は同一の指示物であることを表そうとするのではなく、言外の意味を表すのが話し手の意図するところである。

## 2.2.2 指示する対象が無い場合

指示詞の主な機能は、当然、指示することである。そして、指示する前提は、言うまでもなく、指し示す対象の存在が指示の前提となる。下記の例では、話し手は何かを指し示すのではなく、ある事について「そうであろう」という「確認」を行っている。確認する内容は下記の例(22)～(26)のように、もし、人称代名詞を「A」とし、“不是”と“吗”の間に挟まれた下線の部分を「B」だとすれば、「A」は「B」の担い手であることを表している。これは「A」は「B」と同一の指示物であるというのを表す文脈とは根本的に異なり、指示詞を用いないのは当然のことである。

(22) (レストランの前で) 你不是喜欢吃猪肝吗？就进这家吧。

(23) 你们日本人，不是主张一夫一妻制吗？（张恨水《金粉世家》）

(24) 我大吃一惊：“什么，你有男朋友？你不是很讨厌那些人的追求吗？”

(25) 你明天早上不是有外事活动吗？（方方《暗示》）

(26) 你不是说那个是给我买的吗？怎么又要给他呢！

ところが、次の場合なら、指示詞の“这”を入れることができる。

(27) 你（这）不是拿到文凭了吗？

(28) 她(这)不是向你道了歉了吗?

(29) 你(这)不是刚向他道了歉了吗?

(30) 政府(这)不是主张一对夫妇只生一个孩子吗?

その理由は、例(27)～(30)において、“这”の指示機能が薄れて、意味的には“现在”“刚才”に置き換えることができる。これは、いわゆる“实词虚化”すなわち文法化(grammaticalization)の結果であろう。この用法は「眼前の指示」<sup>5)</sup>という機能から拡張されたものだと考えられる。

また、「現時点の意味」を表している文脈のみ、文法化された“这”が使用でき、既然または未然を表している文脈では、“这”を用いることができない。

(31) 王主任说, (\*这)不是说好九点半钟吗? 怎么这么早就来了。

(刘兴龙 《去老地方》)

(32) 你明天早上 (\*这)不是有外事活动吗? (方方 《暗示》)

### 3. 日中対照の視点から見る“这”の使用

#### 3.1 統語論の視点から

2.1.2で挙げた(4)～(8)の例は、すべて指示詞の省略はできない。一方、日本語の場合、例(6)と(8)の“那”を除いて、“这”を用いる例では、指示詞を用いない方が自然な形、つまり無標の形式である。これは、日中対照の視点から言うと、主語に対するあり方の違いが原因の一つとして考えられる。たとえば、

a. 我叫田中。      b. 田中と申します。

のように、中国語は主語を明示する方が無標の形式で、日本語は主語を明示しない方が無標の形式である。

では、なぜ、例(6)と(8)の遠称の“那”は、日本語と対応できるのに、“这”を用いた例(4)(5)(7)とは日本語の指示詞が対応しにくいのか。すでに指摘されているが、日本語は状況依存の傾向が強い。日本語は、状況から判断できる場合は、主語を明示しないことが多いのはすでに知られている。“这



“不是小王吗？”の“这”は、指示的な機能が薄れて、飾り的で、主語という統語的な機能を果たしていると思われる。統語的な制約がより厳しい中国語は、主語の省略は比較的制限される。一方、状況依存の傾向の強い日本語は、主語の省略については容認度が比較的高い。森田 1998 (18 頁) では、「日本語は場面を前提としたうえでの発話が多く、それだけ場面への依存度が高いと見てよい。それが結果として主語省略や文末の曖昧を生むのである。」と述べている。

話を“不是…吗？”に戻すと、“那不是小王吗？”の“那”は、飾りの“这”と違って、指示機能をはっきりと示している。こういう指示機能を果たす文脈では、当然、日本語でも指示詞を用いて指示することが要求される。

### 3.2 語用論の視点から

2.1.3 節の例 (11) (12) をもう一度日中対照の視点から見ると、これらは、下記の日本語のように、指示詞の「コ」「ソ」「ア」のいずれも用いない方が自然な形式である。

(11) 他惋惜地咂着嘴，又很奇怪地问：“老范，你怎么故意把他放走啦？这不是奖励他干坏事儿了吗？”（浩然《金光大道》）

(11)’ かれは舌打ちして、不審げにたずねた。「范さん、なんでまたわざわざ逃がしたのかね。あのガキに悪さを奨励するようなもんじゃねえか。」

(12) “我没有上吊——”他辩解着：“我这不是好好的嘛！”

(12)’ 「おれは首つりなんかしていないよ。」彼は弁解しながら、「おれは大丈夫さ。」

例 (11) の“这”は前文の“把他放走”を指している。例 (12) の“这”は、話し手の発話時の様態を指している。次にもう一つ聞き手の行為を指す例文を挙げる。

(33) “…用坏了你还不说用坏了，这要是不检查检查，当成好伞再卖给别人，你这不是坑了别人吗？你这不等于是存心败坏本商店的信誉吗？”

（梁晓声 《冉之父》）

- (33)' …自分が壊したのに壊したって言わないなんて。品物の検査をしないで、きちんとした傘として人に売るとは、人をだましてることにならないかしら？あなた（のこの行為）はわざとこの店の信用を傷つけようとしていることになるわよ。

これらの文脈に用いる“这”は、前方の文脈（“上文”）で言及していることを指している（例11、33）か、発話の状況から判断できることを指している（例12）か、のいずれかである。つまり、情報面においては、“这”は新しい情報を提供していない。中国語でも、これらの場合は“这”の省略が可能<sup>6)</sup>である。

グライス（Grice）の協調の原理（co-operative principle）から考えれば、「簡潔に述べよ。」という様態の格率（Maxims of manner）を守っているか否かによって生じた違いだと思われる。日本語は、このルールに従って、先行詞や状況から判断できる場合では、「分かりきったこと」を言わない。一方、中国語は、このルールに背くことによって、「強調」や「際立たせる」といった語用的な効果を得ている。もともと、反語文の“不是…吗”は、強い語気を表すのが特徴で、“这”を用いることによって、この特徴がより浮き彫りにされる。

#### 4. 有標（marked）無標（unmarked）の視点から見る“这”と“那”

一般的な認識では、“这”は無標の形式であり、“那”は有標の形式である。ところが、“不是…吗”構文において、有標、無標は逆になる場合がある。いわゆる“标记颠倒”という現象が起こる。また、この現象は、けっして“不是…吗”構文にのみ起こるものではなく、沈家煊の指摘によれば否定文にも“标记颠倒”の現象が起きる。沈家煊1999（167頁）では、次のように述べている。

“这”和“那”用在否定句中就会出现“标记颠倒”现象：“那”而不是“这”成了无标记项，……这就是说，“这”和肯定有一种自然的联系，构成一个无标记的组配，“那”和否定也有一种自然的联系，构成另一个无标记的组配。

“不是…吗？”構文に用いる指示詞をめぐって

例：原来问题不那么（\*这么）严重。

では、“不是…吗”構文において、“标记颠倒”の現象はどのような文脈で起こっているのかを見てみよう。

#### 4.1 「推論」を表す文脈に起こる“标记颠倒”現象

話し手の「推論」を表す文脈では、“那”が“这”より多く用いられている。「推論」とは「PならばQ」と、話し手が何かにもとづいて判断を下すことを指す。この場合の“那”の機能は“上文”を指示するだけではなく、“下文”を導く働きをも果たしている。

(34) 成本这么高还去做，那不是干赔吗？

(35) 那时我们分手，那不是没办法吗？

(36) 咱们当爹娘的怎么能包办呢？那不是封建吗？（刘绍棠《二度梅》）

「推論」を表す文脈に“那”がよく用いられるのは、けっして“不是…吗”構文のみの特徴ではない。梁敬美 2002 の調査<sup>7)</sup>によると、“推理连接指”<sup>8)</sup>を表す“那”の例は 71 個あるのに対し、“这”の例はゼロであった。

ところが、「推論」を表している文脈でも、“这”を用いる場合もある。

(34)’ 成本这么高还去做，这不干赔吗？

方梅 2002 (350 頁) では、“这”の働きについて、“用‘这’把一个不在前台的对象推到前台来，并且用‘这’保持谈论对象前台的身份。”と指摘している。

つまり、“这”の機能は、カメラのレンズのように、対象をクローズアップする機能を持ち、それを使うことは、眼前のものとして捉えることになる。

しかし、次の二つの例については、“这”に置き換えると、非文になるかあるいは容認度の低い文になる。

(35)’ \* 那时我们分手，这不是没办法吗？

(36)’ ? 咱们当爹娘的怎么能包办呢？这不是封建吗？

(35)’ (36)’ のように、眼前のものとして捉えられるか否かは、指示する対象が、現実的な事件なのか、非現実的な事件なのかによって制約されることが

ある。これについて、方梅 2002 (349 頁) では、“对现实事件中的对象倾向于用‘这’，对非现实中的对象倾向于用‘那’”という指摘がある。過去のことを述べる例 (35) も、仮定を表している例 (36) も、どちらも“非现实中的对象”を指示している。

つまり、「P ならば Q」という「推論」を表す文脈であっても、現実のことを指示しているのであれば、“那”を用いにくい。

(37) 写什么呢？就写我永不吻你了？这 (\* 那) 不是欲盖弥彰吗？

(毕淑敏 《不宜重逢》)

このように、非現実の事を「推論」する文脈では、“那”が用いられ、そういう文脈では“标记颠倒”の現象が起きる。

#### 4.2 「眼前の事」を表す文脈に用いられる“这”

呂叔湘 1985 (203 頁) では、“指陈述当前事物时候，用这多于用那。”という指摘がある。では、「眼前の事」とは、具体的にどのような内容を指すのか。

(38) 她心想这 (\* 那) 两年不是没红卫兵了吗？

(39) 我这 (\* 那) 不是来陪你了么？

(40) 这 (\* 那) 过道不是还空着吗？你还是坐在过道吧。

(41) 你怎么把蟑螂的药给仍了呢？这 (\* 那) 不是保护蟑螂吗？

すでに、指摘されているように、時間を指すとき、“那”は過去しか指示できない。また、人称代名詞の“我”の後ろには“这”しか現れない。例 (40) において、話し手の目の前の“过道”を指しているので、これも近称の“这”しか用いられない。例 (41) は、目の前に起こった行為 (“把蟑螂的药给仍了”) を指しているので、やはり“这”で指示しなければならない、いわゆる絶対指示<sup>9)</sup>である。

ところが、「物」を指す場合、目の前の物を指す時でも、“那”を用いることがある。

(42) 秀珠道：“这纸是作什么用的？我却不懂。决不是平常放在信封里的香

“不是…吗？”構文に用いる指示詞をめぐって

紙。”润之道：“这是日本货，是四姐姐在东京寄来的。你仔细看，那上面不是有极细的碎粉吗？”（张恨水《金粉世家》）

上の例は、“秀珠”の手に持っている“香纸”について話す場面である。“秀珠”と“润之”は互いに近い距離で話している。この例文の興味深いところは、同じ距離にある物、しかも“秀珠”が手に持っているという条件に変化が無いのに、近称の“这”を用いたり、遠称の“那”を用いたりする点である。その理由は、初めて言及するかどうかに原因があるのではないかと思われる。初めて言及する時は“这”を用いる傾向が強く、二度目に言及するときは、既知の対象として“那”が選択されたのではないかと思われる。

(42) の例について言えば、指示詞を選択するのにあたって、指示する対象が「眼前」であるかどうかという基準だけではなく、初めて言及されたどうかも基準になる。(42) の場合では後者の方が優先された。

## 5. まとめ

“不是…吗？”構文において、“这”と“那”の使用に「不均衡」が生じた理由は、“这”が用いられる指示範疇が“那”より広いことが考えられる。特に、発話現場における行為指示、状況指示は“这”がよく用いられる。指示詞を用いない場合のもっとも根本的な理由は、同一の指示物を表す文脈ではないからであろう。

日本語と比べて、指示詞が“不是…吗？”構文で多用された理由は、二つあり、一つは主語に対する振る舞いの違い、もうひとつは、「協力の原則」を守るか否かである。

「推論」する文脈では“那”がよく用いられるが、非現実な事を指す文脈でなければ用いにくい。“这”については、“这”を用いなければならぬいわゆる絶対指示がある。「眼前の事」を指示するのに“这”がよく用いられるが、「眼前」以外の要素が絡む場合、その「眼前」以外の要素が優先されることがある。

さまざまな要素が絡むときに、どの要素が優先的に作用するのかについては、さらに検討する余地がある。

## 注

- 1) 吕叔湘 1984a 《语文杂记》 上海教育出版社
- 2) 詳しくは徐丹 (1988) を参照されたい。
- 3) 使用コーパス：<http://www.google.com/> <http://www.ai-shu.net/>  
<http://garden.2118.com.cn/goodbook/>
- 4) 有標、無標を判断するのにあたって、“频率标准”が一つの判断基準である。詳しくは沈家煊 (1999) を参照されたい。
- 5) 「眼前の指示」は吕叔湘 1985 (203 頁) の“指陈述当前事物”に相当し、現場指示だと考える。
- 6) 例 (11) は“这”の前に“你”があれば、“这”を省略可能である。つまり、この場合の“这”は主語という統語的な機能を果たしている。
- 7) 詳しくは梁敬美 2002 を参照されたい。
- 8) 梁敬美 2002 の“推理连接指”の定義は“连接小句或上下句段，承接上一段的表达，引进结果，判断等，推理性强，可以接话轮提问。”である。
- 9) 「絶対指示」は堀口 (1992) によると「場所・時間に関するもので、常に特定の対象を絶対的に指示する用法」である。

## 参考文献

吕叔湘 1985 《近代汉语指代词》 学林出版社

沈家煊 1999 《不对称和标记论》 江西教育出版社

徐丹 1988 「浅谈这 / 那的不对称性」《中国语文》 1988 年第 2 期

方敏 2002 「指示词“这”和“那”在北京话语中的语法化」《中国语文》 2002 年第 4

期

梁敬美 2002 「“这一”、“那一”的语用与话语功能研究」

中国社会科学院博士论文 2002 年第 4 期

“不是…吗？”構文に用いる指示詞をめぐって

池上嘉彦 2000 『「日本語論」への招待』 講談社

木村英樹 1992 「中国語指示詞の「遠近」対立について

——「コソア」との対照を兼ねて——」

『日本語と中国語の対照研究』（上） くろしお出版

金水敏 田窪行則（1992）『指示詞』 ひつじ書房

吉本 啓（1992）「日本語の指示詞コソアの体系」『指示詞』金水敏 田窪行則

1992 ひつじ書房

堀口和吉（1992）「指示詞の表現性」『指示詞』金水敏 田窪行則

1992 ひつじ書房

森田良行 1998 『日本人の発想、日本語の表現』

中公新書

Levison, 1983 Pragmatics, Cambridge University Press.

（そう たいわ・お茶の水女子大学大学院博士後期課程）